

## 心もよう

“いつまで続くこの残暑”といった感じでしたが、やっと秋の気配を感じる日々になりました。

“おはようございます”いつものように、井上さんがにこにこ診察室に入ってきました。井上さんは、元教員の83歳の女性ですが“おばあちゃん”と呼ぶと私がかかられます。“おばあちゃんと呼ばれると年寄りたいでいやだから”というのが理由です。外来では“井上さん”“先生”と呼び合って診察しています。井上さんは時々“もう、いつ死んでもいいと思っているのだけれど”と話しています。私は“まだまだ元気だし死にそうもないですよ！ところで先立たれたご主人は迎えに来てますか”と話すと“それが先生、もう先立たれて24年になるけれど、まだ迎えに来ないのよ。きっとあの世でいい人でもできたのでしょ”と。井上さんとは月に1度の外来で糖尿病の話はせずに、このような話をしているわけです。井上さんは、診察が終わるとき“先生いつも雑談ばかりで外来のジャマしてごめんね。でも楽しかった”とあって帰られます。

佐藤さんは、80歳になる女性で、私のクリニックに通院してからもう5年になります。ヘモグロビンエーワンシー(HbA1c)は、7%台で(コントロール良好は5.8%以下)、私がかもっとコントロールを良好にしよう

とすると“先生、私は薬(経口糖尿病薬)を飲んでまで、血糖を下げるのはいやなの”と言い張る方で、“しょうがないですねー”とあって外来診療をしている患者さんです。今月の外来では、めずらしくHbA1cが7%以下に下がっていたので“どうしたの佐藤さん!”と思わず聞いてしまった程でした。佐藤さんは“気を付けたのよ先生、ラーメン食べたけど汁は飲まなかったんだから”と。私は、“えらい！たいしたものですねぇ。”といったような楽しい会話が終わりに近づいた頃、佐藤さんは“ところで先生、いつも思っていたのだけれど、ここに来ているのは本当に患者さんなの?”との質問。私は“どういうこと?”と聞き返すと、佐藤さんは“だって。ここに来ている患者さんは、待合室でも、診察室でも、採決室でも、どこかで必ず誰かが笑っているんですもの。まるで病気じゃないみたい”と。

糖尿病患者さんの、病気への不安や、食べ物へのストレスは大変なものです。血糖値の話をするばかりが糖尿病の診療ではありません。こちらから話をするだけではなく、患者さんの話をよく聞くことが大事です。診察を終えて帰るたびに“今日も来てよかった”と思える外来でありたいものです。